

三成分を使いこなす

滋賀工組 福井宇部の事例紹介



里川委員長

滋賀県生コンクリート工業組合（川浦雅彦理事長）は11月28日、大津市内のホテルで技術講演会を開いた。同工組技術委員会の里川委員長が今年度同委員会を取り組んでいる再生骨材を使用したコンクリートの耐

凍害性に関する実験の概要を説明。スランプや空気量、圧縮強度の結果を報告した。長さ変化や中性化といった耐久性試験については現在中研コンサルタンに依頼しており、来春に報告する。また、11月に日野町で県発注工事として初めて、1 DAY PAVE（早期交通開放型コンクリート舗装）が採用されたことを紹介した。

講演会では、福井宇



石川常務

部生コンクリートの石川裕夏常務が「コンクリート技術の現状とこれからの展望」の題で講演した。北陸新幹線の金沢～敦賀間の延伸工事に納入した早強セメントとフライアッシュ（FA）を結合材に使用したコンクリート

の製造時の苦勞やFA用のAE剤を利用した経験を披露した。

また、同社が環境配慮型コンクリート「FBコン」を開発した経緯についても紹介した。2000年代初頭にグリーン購入法の施行や国土交通省、福井県の発注工事で土木物件に高炉セメントB種が原則的に採用されるようになったことで、同社ではひび割れのクレームが増加。その原因を調査した結果、高炉セメントB種の比表面積が1980年代に比べ細かくなってお

り、水和熱の上昇抑制効果が少なくなっていることを突き止めた。

これを受け、同社は03年から温度ひび割れ抑制策として、高炉セメントB種とFAを内割置換した三成分系セメントによる「FBコン」の実用化の検討を開始。福井県や福井大学らとの共同研究を通じて、JIS認証取得、NETISにも登録したことなどを紹介した。現在は二酸化炭素（CO₂）削減を目的として他地域でも三成分系セメントを使用したコンクリートが注目されており、同社でも再度FBコンを環境配

慮型コンクリートとしてPRしている。また、FBコンの技術を応用して流動化モルタル「FBモル」も展開している。

色むら抑制で研究

質疑応答では、同社が立命館大学、日本建築総合試験所とともに取り組んでいるコンクリートの色むら抑制に向けた研究について、参加者から複数の質問が寄せられ、石川常務は「コテ仕上げの回数」がコンクリートの色むらの濃淡に係っていることなどを説明した。